

歴史小説『嵐の前』

——歴史家フォンターネから小説家フォンターネへ——

城川まゆみ

はじめに

フォンターネ Theodor Fontane (1819–1898) は非常に晩成の作家である。薬剤師、ジャーナリストという職を経た後、1876年、56歳で定職を放棄して念願の「自由な作家」として独立し、2年後の1878年、最初の長編小説『嵐の前』*„Vor dem Sturm“* を発表して本格的な創作活動に入った。薬剤師時代にもベルリンの文学サークルでバラードを発表し、その後ジャーナリストとしても、多くの評論や紀行文、戦記などを著してはいるが、小説家フォンターネとして一連の社会小説で本領を發揮したのは、『嵐の前』発表後の晩年の20年間である。

このフォンターネの処女小説『嵐の前』は、1813年の対ナポレオン解放戦争の前夜を描いた歴史小説であり、その構想から完成まで実に20年以上を要している。まさに、作者の小説家への過渡期を通して生み出された作品と言えよう。

本稿では、フォンターネ自身の書簡等を手がかりとしながら、まず作品の長い成立史を振り返った後、『嵐の前』を、歴史小説と「多様小説」という対立する二つの観点からとらえ、作品の成立過程における作者フォンターネの歴史家から小説家への成長を考えたい。

1. 構想から完成までの長い成立史 —— 小説家フォンターネへの過渡期

フォンターネの処女小説『嵐の前』は、その構想から完成まで24年もの歳月を

要している。作者の全作品中でも他に例を見ないこの長い成立史は、バラード作家、ジャーナリストとしての若いフォンターネから、小説家としての老フォンターネへの過渡期に当たり、作品を理解する上で最も重要な問題となる。以下では、この長い成立史を作者の足跡と共に、年代を追って見ていきたい。

『嵐の前』は、その最初の構想を1854年にまでさかのぼることができる。当時、フォンターネは35歳であり、プロイセン政府の中央新聞局に勤務し、1852年のロンドン派遣以来、主にイギリス関係の仕事を担当していた。1854年にも、最初の旅行記『ロンドンの夏』を発表している。そしてこの年の夏、フォンターネとシュトルム Theodor Stormとの間に交された手紙の中で、フォンターネの小説執筆計画が、わずかにではあるが言及されている。

シュトルムからフォンターネへ

8月5日付け

……『ウォルズィ』はどうなっていますか。¹⁾

シュトルムからフォンターネへ

8月19日付け

……毎日私は、あなたが計画している両方の仕事、短編小説と長編小説のことを考えずにはいられません。そして、妻とよくそのことを話しています。²⁾

シュトルムからフォンターネへ

9月12日付け

……9月14日の私の誕生日に来ませんか。……もし来れるなら、『ウォルズィ』か『シル』についてすでに出来上ったものを持っていらっしゃい。³⁾

フォンターネからシュトルムへ

9月12日付け

……私はいくらか仕事をしましたが、『シル』と『ウォルズィ』については、まだ何も紙の上には書かれていません。⁴⁾

この最後の手紙が、フォンターネ自身が『シル』と『ウォルズィ』について具体的に言及した、最初で最後の機会である。

ここで話題となっている『シル』構想とは、結局、構想のまま終ってしまうのであるが、ナポレオンに対するプロイセンの蜂起を促すため、1809年、自らの連隊のみを率いて独断でフランス軍と戦い、壮絶な最期をとげたプロイセンの英雄シル Ferdinand von Schill (1776–1809) を主人公にしようとするもので、明

らかに『嵐の前』へとつながっている。これより以前の1847年、フォンターネは同じシルを讃えたバラードを発表している。

一人の孤高なる男がいた、名をフェルディナント・フォン・シルという、／彼は臆病に朽ち果てるより、勇敢に死ぬ方を選んだ、／フランス兵達のドイツ国内での傍若無人な振舞いに、彼は我慢ができなかった、／他の誰も戦おうとはしなかったが、彼は単身で戦いを挑んだ。⁵⁾（『シル』第一節）

一方の『ウォルズィ』構想は、未完成の断編として遺稿の中に埋もれることになるが、こちらは素材をイギリス史から得ており、ヘンリー8世に仕えた枢機卿ウォルズィ Thomas Wolsey (1471–1530) が主人公である。そして、この断編のもう一人の主人公と言えるイギリス貴族シュルースブリー伯爵は、『嵐の前』におけるベルント・フォン・ヴィツェヴィッツに通じる貴族像と言える。

このように、1854年のフォンターネの小説執筆計画、『シル』構想と『ウォルズィ』構想は、現実の作品とはなり得なかつたが、そこには、作者の処女小説『嵐の前』へとつながる歴史小説の輪郭がはっきりと見て取れる。

この後フォンターネは、1855年9月にプロイセン－イギリス間の新聞通信員として再びイギリスへ渡り、1859年1月までの3年以上をロンドンで暮した。この当時、世界の中心であったイギリスを直接に体験できたことは、文学的にも、また政治的にもフォンターネに大きな影響を与えた。特に注目すべきは、フォンターネの保守化と歴史への傾倒であろう。フォンターネは、イギリスの政治体制に自由主義と保守主義との融合を見い出し、また、市民階級との調和の中にその権力を保持しているイギリス貴族の在り方に接し、貴族階級への共感を深めた。さらには、古い歴史と伝統に支えられたイギリス文化とその堅固な国民感情に、羨望にも似た感銘を覚え、歴史の持つ重要性を再認識させられた。そして、スコットランドにイギリス史の源を求めた。イギリスにとってのスコットランドは、プロイセンにとってのマルク・プランデンブルクと言える。その結果、フォンターネはより一層古きプロイセンと、そしてその源であるマルク地方とマルク貴族へと向かっていくことになった。イギリス滞在中の1857年の作者の日記には、「『プランデンブルク史』という題の本を考えています。」⁶⁾と記されている。この本が後

の『マルク・プランデンブルク周遊記』であることは言うまでもない。

1859年にイギリスからベルリンへ戻ったフォンターネは、早速にマルク地方の踏査を開始し、その紀行文の執筆に取りかかった。こうして『マルク・プランデンブルク周遊記』(以下略『周遊記』)全3巻(1861-1873)が成立する。特にその第2巻『オーダー地方』(1863)では、『嵐の前』の舞台となるオーダー川沿岸地域が描かれている。この『オーダー地方』が書かれた1860年、イギリス体験の影響下にあってまだ保守的傾向の強かったフォンターネは、自らの小説執筆計画について、編集者に宛てて次のように述べている。

私は、今頃次第に、私の「マルク地方像」の出版のことを考えています。私はそれを『オーダー川とエルベ川の間で』という題でこの世に送り出したいと思っています（もっと短い題が思い付かなかった場合のことですが）。……その内容は、決定的に保守的です（反動的という嫌な意味においてではありません）。⁷⁾

結局この題は変更されてしまうが、その後1863年から64年にかけて、ついに『嵐の前』(当時の題は『レヴィン・フォン・ヴィツェヴィッツ』であった)の最初の部分が書き始められている。しかし、構想から約10年後にしてようやくの執筆開始も、前述の『周遊記』の執筆に加えて、さらに幾度かの戦争の勃発により、作者が従軍記者として戦地に赴き、その報告を戦記としてまとめねばならぬために中断せざるを得なくなる。こうしてフォンターネは、再び10年以上も『嵐の前』から遠ざかることになるのである。

『周遊記』や戦記をすべて書き終えた作者が『嵐の前』の執筆を再開したのは、1876年2月である。そして1878年4月までの2年余りで、全4巻を集中的に書き上げている。

フォンターネが『嵐の前』の本格的な執筆を開始した1876年は、作者にとって特別重要な意味を持つ「決断の年」であった。同年3月、ベルリン王立芸術アカデミーの常任書記に任命されるが、官僚主義と衝突し、8月に辞職する。これによってフォンターネは、それまで束縛され続けてきた一切の公職から解放され、長年の念願であった「自由な作家」として独立し、創作活動に専念できることに

なった。しかし、この決断にともなう経済的困窮のため、妻エミーリエとの仲は危機を迎える。この時期、フォンターネは友人に宛てて、次のように心中を吐露している。

実際にこの小説は。この小説は私にとって、絶望的なこの時期にあって、私の唯一の幸福、慰めなのです。これを書くことで、私は苦しいことを忘れられるのです。しかし、もしこの小説が今後世に出ることになるならば、私はその成立の時期を振り返りながら次のように言うでしょう。苦心の作よと。しかしこの小説には、苦心の作というもののどんな特徴も見られません。この小説は多くの点で明るくて、従って、悲惨で病的なところなど全くないです。この点だけは、私は確信をもって主張できます。……私はこの小説を書きながら、私はただ作家でしかないのあって、この美しい職業にのみ——高慢な教養主義的賤民は笑うかもしれません——私の幸福を見い出すことができると感じています。⁸⁾

57歳という高齢に達してようやく作家として出発することができたフォンターネは、その喜びと期待の反面、生活上の苦しみと不安を忘れるためかのように、2年という短期間で、作者の全作品中で最も長編の『嵐の前』を仕上げている。しかしこれはまた、それまで20年以上も作者の中で温められてきた構想、素材が、それだけ充実しきっていた証であり、逆に言えば、作者の方が、それらの構想や素材から自分にふさわしい小説を作り出せるまでに成長した証でもあろう。

『嵐の前』の成立期に当たる1850年代から1870年代にかけては、若いフォンターネから老フォンターネへの長い過渡期でもあった。この間、プロイセン社会もフォンターネ自身も、常に密接にかかわり合いながら大きな変化を遂げてきた。1848年の三月革命の失敗に始まり、それに続く50年代の反動政治と著しい経済発展。かわって60年代からは、ヴィルヘルム1世の治世となり、ビスマルクが登場する。そして、70年代のドイツ帝国の成立へと至る。こういったプロイセンの社会変化を背景として、自由主義思想のもと三月革命に参加し、挫折した若いフォンターネは、50年代、意に反して反動政府下の機関で働きながらも貴重なイギリス体験

を積み、60年代、70年代は、マルク地方の紀行文作家、戦記作家として当時の社会状況を冷静に見つめながら、それまでの様々な体験を自らの内で浄化、展開させ、小説家老フォンターネへと成長していった。つまり『周遊記』も戦記も、『嵐の前』にとっては決して中断などではなく、すべてが作者の成長のために必要な準備段階だったのである。作者の処女小説『嵐の前』の成立過程は、まさに小説家フォンターネの成立過程でもあった。

2. 歴史小説『嵐の前』——マルヴィッツからヴィツェヴィッツへ

小説『嵐の前』は、その副題「1812年から13年にかけての冬の小説」(Roman aus dem Winter 1812 auf 13) からもわかるように、東エルベのオーダーブルフ地方を舞台に、実際の歴史的人物をモデルに作られたマルク貴族ベルント・フォン・ヴィツェヴィッツと、その息子レヴィンを中心に据えて、1813年の対ナポレオン解放戦争の前夜を描いた歴史小説である。フォンターネは、両親が1838年に、作品中にも登場するレッチンに引っ越しして薬局を開いているので、オーダーブルフ地方には若い頃から特に親しみを感じていたようである。『嵐の前』執筆再開前の1860年にも、作者は『周遊記』の第2巻『オーダー地方』の取材のため、この土地を詳しく訪れている。『オーダー地方』は、『嵐の前』のための地理的、歴史的な準備作品となった。フォンターネにとっては、その処女小説の舞台として、このオーダーブルフ地方以上の所は考えられなかったであろう。

一方作品の時間的舞台として、1813年の対ナポレオン解放戦争の前夜が扱われているのは、もちろん作者の歴史への傾倒によるものである。フォンターネは幼い頃より父親によって歴史への興味を植え付けられ、文学サークル「トンネル」においてもプロイセンの英雄を讃えたバラードを発表していたが、それが1850年代のイギリス体験でより決定的なものになり、その結果『周遊記』が成立した。小説家フォンターネとなる以前の、60年代、70年代の過渡期の作者は、まさに歴史家であったと言ってもよい。プロイセン史の源としてのマルク地方とマルク貴族は、作者にとって、その後も終生変わぬ重要なテーマであり続けたが、しかし一方では、歴史家フォンターネから小説家フォンターネへの脱皮も、また着実に

進行していたのである。小説家フォンターネにとっては、もはや古いプロイセンではなく、様々な矛盾を抱えた現代プロイセン社会こそが問題となってきた。『嵐の前』を生み出した過渡期のフォンターネは、現代へと強く引き寄せられながらも歴史から完全に離れてしまうことができず、その間で揺れ動いていたのであった。

フォンターネは確かに『嵐の前』において、1812年から13年にかけての冬という「過去」を取り扱っている。しかしそれは、「現在」と全く切り離されてしまった、孤立した「過去」では決してない。フォンターネは1875年の文学評論で、作者自身が非常に影響を受けたスコット Walter Scott (1771–1832) の歴史小説について次のように述べている。

小説は、私達自身が属する時代の像であるべきです。少なくともその境界線上に私達自身がまだ立っている、あるいは、それについて私達の両親がまだ物語れる、そのような人生の反映であるべきです。……なぜ彼はすぐ最初から自国の歴史をはるか過去にまでさかのぼらなかったのでしょうか。なぜなら彼は、二世代が越えられ得る大体の限界であり、それを越えることは、少なくとも規則上は勧められ得ないということを、非常に正しく感じ取っていたからです。彼の最高の作品は18世紀の内側に、あるいはその入口にあります。……繰り返すならば、現代的小説は一つの時代の像、その時代の像であるべきなのです。⁹⁾

『嵐の前』で描かれている1812年から13年にかけての時期は、フォンターネが生まれる約7年前であり、さらに、作者は幼い頃父親からよく当時の思い出話を聞かせてもらったということからも、前述の限界内にあることになる。フォンターネは自叙伝『我が幼年時代』(1893) の第一章「私の両親」において、父親の思い出を次のように語っている。

1813年の秋、国王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世の国民への布告によって、父の見習期間は、丸々半年間縮まって終りを告げた。なぜなら、父もまた自ら進んで軍隊への参加を申し出た者達の一人であったからで、当時、父はまだ17歳になっていました。それに続く戦争の期間について、父はよく私に話して聞かせてくれました。殆どが私にせがまれてのことでしたが。私はその話

をいくら聞いても、聞き足りるということがなかったのです。¹⁰⁾

このように親が子供に話して聞かせることができる時代が限界で、それ以上の遠い「過去」を取り扱うことは、フォンターネにとって、小説の規則に反することであった。なぜなら、作者にとって大切なことは、つまりそれが作者にとっての歴史小説の使命でもあるのだが、「現在」とまだつながっている「過去」を描き出すことで現代社会批判がなされ得るということ、「現在」に何かを教え、訴え、さらには警告できるということなのである。たとえ作品中で「過去」を取り扱っていようとも、作家の目は、常に「現在」へと向けられていなければならなかった。フランス革命やナポレオンという存在は、フランス・ユグノー派の家系に生まれたフォンターネにとって、確かに特別の意味を持ってはいたが、それ以上に、プロイセンがナポレオン軍に敗れた1806年のイエーナ会戦後、プロイセンに真の国民意識が目覚め、1813年の対ナポレオン解放戦争へと向かったことを考えるならば、まさに1813年は、19世紀プロイセン史における大きな転換点であり、「現在」のプロイセンの繁栄の原点であったと言える。1813年は単なる「過去」ではなく、紛れもなく「現在にお息づいている過去」なのであった。

歴史小説『嵐の前』において、物語をフランス軍襲撃へと導いていくマルク貴族ベルント・フォン・ヴィツェヴィッツは、その歴史的素材をマルヴィッツ回想録¹¹⁾に得ている。このオーダーブルフ地方のフリーダースドルフの領主マルヴィッツ Friedrich August Ludwig von der Marwitz (1777–1837)（以下略マルヴィッツ）に関しては、『周遊記』第2巻『オーダー地方』の「フリーダースドルフ城」という章において詳しく述べられている。ここではそれをもとに、マルヴィッツの生涯とその時代背景を簡単に説明しておきたい。

代々優秀な軍人を出しているマルヴィッツ家の中にあっても、このマルヴィッツはとりわけ勇敢で、堅固な性格の持ち主であった。彼は1777年、ベルリンに生まれ、13歳で入隊し、マルク貴族に典型的な経歴を歩む。彼は生来の王権主義者であったが、宮廷の軽薄な雰囲気が性に合わず、1802年に退役し、領地フリーダースドルフに引っ込む。その後結婚し、田舎での生活にも満足していたが、その最愛の妻も一年足らずで失うことになる。孤独も加わって、彼は当時の社会情勢、

特にナポレオンの高慢ぶりには非常な憤りを感じた。オーストリアやロシアと共にプロイセンも中立の立場を捨て、ナポレオンと戦うべきであると主張し、マルヴィッツは再び軍隊に戻る。しかし、1805年のオーストリアのアウステルリッツでの惨敗、続く1806年のイエーナでのプロイセンの敗北がすべてを決してしまった。敗戦後のプロイセンでは、シュタイン Karl von Stein (1757–1831) によってブルジョア的諸改革が行われ、さらに1810年以降は、ハルデンベルク Karl August von Hardenberg (1750–1822) がその後を引き継いで経済改革を押し進めた。マルヴィッツはプロイセンの再興、復活を願い、また信じてもいたが、現実に行われる新しい諸改革には不満で、特にハルデンベルクに対しては非常な反感を抱いていた。マルヴィッツにとって貴族という身分は絶対的なものであり、厳然たる階級意識を持っていた。つまり、エゴイズムを排し、国家への忠誠心を呼び起こす。惰性や放縱ではなく、思慮や義務感、権利意識が、軽薄ではなく信仰心が大切なのであった。マルヴィッツが望んだのは、このような精神面からのプロイセン社会の改革であった。ところが、ハルデンベルクの改革は全くの経済的なもので、1811年、その経済改革が貴族階級の権利を侵害し、貴族達の不満が爆発した時、当然のこととしてマルヴィッツはその先頭に立ってハルデンベルクと対峙した。マルヴィッツ自身は、貴族階級にとって至極当たり前の権利を主張しているつもりであったのが、見せしめのため一方的に逮捕され、幽閉されてしまう。しかし、彼はそれによって打ちのめされることなく、その後、むしろ意気揚々と領地へ引き上げた。この事件以来、「自力で切り抜ける」がマルヴィッツのモットーとなった。そして、『嵐の前』で描かれる1812年から13年にかけての冬が訪れる。ナポレオン軍のロシア遠征での敗退を知ったマルヴィッツは、再びかつての敵対者ハルデンベルクのもとに出向き、今こそ戦わねばならぬ時であると訴えるが、またも政府の意向は戦いではなく交渉であった。けれども、シュタインの努力やヨーク将軍の降伏¹²⁾などで、1813年3月、ついに国王が宣戦を布告した。マルヴィッツは少佐として軍を率い、戦場で数々の功名を立て、将軍にまで出世するが、1827年に退役、1837年12月、フリーダースドルフでその波乱に満ちた生涯を閉じた。

以上、マルヴィッツの生涯を一通り眺めてみたが、そこで最も問題となるのは、

1813年の対ナポレオン解放戦争ではなく、1811年のハルデンベルクとの対立である。マルヴィッツにとっては、貴族はすべてにおいて最高の存在でなければならなかった。現実の貴族像と、自らが思い描いている理想化された貴族像との間の大きな溝に気付かず、市民階級に対する貴族的偏見から免れることができなかつた。言い換えれば、彼自身があまりに模範的貴族であろうとしたためであらう。フォンターネは、次のような言葉で『周遊記』の「フリーダースドルフ城」の章を閉じている。

真面目な努力、真実を求めての戦い、全く無欲の祖国愛という点では、彼は、私達にとってもまた模範、手本なのです。¹³⁾

このような素材マルヴィッツと共に、ここでさらに注目しておきたいのは、歴史小説家アレクシス Willibald Alexis (1798–1871) が、すでに1854年に、同じマルヴィッツをモデルにしたマルク小説『イゼグリム』 „Isegrimm“ を発表しているということである。前述のスコットは、歴史小説におけるフォンターネの手本であった。従って、そのスコットのプロイセンにおける後継者と言えるアレクシスと、同じ素材を扱った作品『イゼグリム』も、『嵐の前』に少なからぬ影響を及ぼしたと考えられるが、フォンターネ自身はこの点に関して次のように述べている。

『イゼグリム』を私は非常に高く評価しています。私はその前半部をアレクシスが書いたものの中で最上で最重要なもの、例外的箇所はあるにしても、確かにスコット以上のものであると見なしています。しかし、アレクシスが時代の調子をとらえていたかどうかは、私には疑わしく思えます。当時はすべてがそのように真面目で、憂鬱で、熱狂的であったと、誰もが信じてしまうにちがいないでしょう。私自身も、もし私が異郷人であったなら、それを信じてしまうでしょう。しかし、私の両親やシュヴィーネミュンデの名士連は、……当時の人々がいかに陽気であったかをいつも話してくれたものでした。……アレクシスが描いたものも確かに存在はしますが、しかしそれは例外です。その他の点では、アレクシスと私は同じ源から創作しました。マルヴィッツ回想録です。

彼はマルヴィッツから『イゼグリム』を作りました。私はヴィツェヴィッツを。それらの中にもまた、私達の性格の違いが現れています。彼は憂鬱質でした。私は全くの楽天家です。¹⁴⁾

両方の作家とも（スコットとアレクシス——筆者注），私にとって非常に大切な存在となりました。……両者とも、私は一方を若い時に、他方を50歳になってからようやく読んだにもかかわらず、私の晩年の作品に影響を及ぼしましたが、しかし、ただ全く一般的に、方向においてのみです。私はこれら両者の影響を、個々には全く意識していません。私に最も影響を及ぼしたのは、歴史的なもの、伝統的なもの、つまり、マルヴィッツ将軍の回想録……です。¹⁵⁾

まずフォンターネは、『イゼグリム』を、『嵐の前』と同じ源から創作されたものとして評価しながらも、互いに全く異なった色合の作品であるとして、その違いも強調している。さらに、後の方に引用した手紙はもっと晩年になってからのものであるが、フォンターネは自分の作品におけるスコットとアレクシスの影響をむしろ否定しようとしている。このような作者の態度は、非常に重要な意味を含んでいる。それは、歴史家から小説家への作者の成長を表しているからである。小説家フォンターネにとっては、自分の作品、とりわけ『嵐の前』が、スコットとアレクシスの影響のもとに作られた歴史小説としてのみ、一面的に受け取られることが我慢できなかったのであろう。作者はまさに『嵐の前』において、以前の歴史家としての自分自身に決別を告げようとしていたのである。

小説『嵐の前』は、素材的に見れば確かに歴史小説である。しかし、歴史小説という型に作品を完全にはめ込んでしまい、その歴史的素材のみを重要視し過ぎてしまうと、その結果、マルヴィッツとベルント・フォン・ヴィツェヴィッツを全く同一視してしまって、『嵐の前』を愛国心やユンカー気質、保守主義やさらには反動主義などといった面からのみ一方的にとらえてしまう恐れがある。けれどもフォンターネは、歴史的素材マルヴィッツをそのまま『嵐の前』に取り入れているわけでは決してない。マルヴィッツからベルントへと、作者による明確な修正がなされている。そしてこの修正こそが、『周遊記』から『嵐の前』への、

つまり、まだイギリス体験の影響下にあった歴史家フォンターネから小説家フォンターネへの成長を示すものなのである。この修正とは、一言で言えば、「歴史的英雄から一人の人間へ」であり、具体的には主に次の二点においてなされている。それは、1811年の事件の抹消と、ナポレオンに対する憎しみの動機づけの修正である。

マルヴィッツの生涯において最も決定的な事件となった1811年のハルデンベルクとの確執に関しては、『嵐の前』においては何一つ描かれていない。1811年から1813年へと重点が置き換えられてしまっている。1811年のマルヴィッツの英雄的行為は政治的なものであった。それを作品中で取り扱おうとするならば、ハルデンベルクのプロイセン改革など当時の政治的、社会的状況を説明し、マルヴィッツの政治的立場を明確にしなければならない。しかしフォンターネは、そのようなマルヴィッツの政治的な面を描くことを避けた。それゆえ1811年の事件そのものには全く触れず、マルヴィッツの人間的な面だけを、その純粋な愛国心と、自らの信念に従い、それを貫く勇気、つまり「自力で切り抜ける」という彼のモットーをベルントに取り入れたのであった。

ところで、なぜフォンターネは、マルヴィッツの政治的立場を描こうとはしなかったのであろうか。そこで問題となるのが、フォンターネの貴族観である。前述したように、フォンターネは50年代のイギリス体験で、古い伝統を重んじながらも現代社会と融合し、なおその力を保持しているイギリス貴族の在り方に接し、貴族階級への共感を深めた。そしてそれが歴史への傾倒と相まって、作者は、プロイセン史の源であるマルク地方とマルク貴族へと向かっていった。しかし、そのような歴史家フォンターネとしての貴族観も、作者の小説家への成長にともない次第に変化していく。つまり、二面性を帯びてくるのである。歴史への興味と結び付いて幼い頃より培われてきた、古き良きマルク貴族への作者の強い愛着は、歴史的、文学的な面においては、その後も終生変ることはなかった。しかし小説家フォンターネの鋭い批判眼は、政治的、社会的には、貴族階級を現代社会にそぐわぬ時代遅れなもの、滅びねばならぬものと見なした。作者のこのような二面的な貴族観が顕著に現れてくるのは、より晩年になってからであるが、『嵐の前』の執筆を再開した頃の作者が、すでに貴族に対して批判的になってきていたこと

は確かである。従って、『嵐の前』はマルク貴族を中心に描かれてはいるが、それは、貴族に対する一方的な賞賛の現れでは決してないことに注意しなければならない。さらには、1811年のマルヴィッツの行動は、貴族階級を絶対視、理想視するがゆえのものであった。マルヴィッツのそのような貴族至上主義をそのままベルントに持たせることは、小説家フォンターネにはもはや許されぬことだったのである。

1811年のマルヴィッツとハルデンベルクとの確執は、作者の手によって抹消されてしまったが、マルヴィッツがナポレオンへの蜂起を訴えるため旧敵ハルデンベルクを訪れる場面は、『嵐の前』にも取り入れられている。1812年の暮れ、ベルントもマルヴィッツと同様にハルデンベルクを訪れ、今こそ戦わねばならぬ時だと懸命に訴えるが、やはり拒絶されてしまう。しかしこのベルントとハルデンベルクとの会見も、実際の場面としては描かれておらず、ベルントの口から会見の様子が語られるのみである。

『嵐の前』におけるハルデンベルクは、戦いではなく交渉に依ろうとする当時のプロイセン政府の代表者として、さらには、国王をたぶらかして宣戦布告を妨害している挑本人として、戦いを主張するベルントの非難の矢面に立たされている。しかしベルントも、ハルデンベルクと自分とは、手段は違っていても目的は同じであることをはっきりと認識しているし、対ナポレオン問題以外のハルデンベルクの政策については全く話題にのぼらない。

マルヴィッツからベルントへの第二の修正は、ナポレオンに対する憎しみの動機づけにおいてなされている。マルヴィッツは、政治的には完全な保守主義者であった。決して反動主義者ではなかったが、彼が望んだプロイセンの再興とは、新しいプロイセンへと生まれ変ることではなく、過去の栄光を取り戻すこと、いわば後戻りであった。従って、フランスとナポレオンに対するマルヴィッツの憎しみは、フランス革命とその理念への、新しく生まれつつある時代の波への恐れと反感の現れであった。ところが一方、ベルントのナポレオンに対する憎しみは、フランス革命の理念などとは全く無関係の非常に人間的な動機づけをされている。ベルントは1806年のイエーナ敗戦後、フランス兵達の無礼な振舞いが原因で最愛の妻を亡くした。その大きな痛手から立ち直るためにには、同様に大きな憎しみの

力に頼るしかなかった。けれどもベルントは、心の底では、フランス人に対して断ちがたい愛着を感じていた。これは作者自身の愛着でもある。そのため憎しみはすべて、イタリア人であるナポレオンへと向けられることになった。つまりベルントのナポレオンに対する憎しみは、意図的に作り出されたものだったのである。

このようにフォンターネは、マルヴィッツから政治的、思想的なところを取り去ってしまい、その人間的なところだけをベルントに移し変えた。歴史的英雄としてではない、強さも弱さも合わせ持った一人の人間としてのベルントを描こうとしたのである。Reuterは、マルヴィッツからベルントへの作者によるこのような修正は、単なる「修正」にとどまらず、『周遊記』において描かれたマルヴィッツ像の「取り消し」とも見ることができると評している。¹⁶⁾

さらには、マルヴィッツをモデルにするならば、なぜフォンターネは、マルヴィッツが数々の功績を立てた1813年の対ナポレオン解放戦争そのものを描かずに、その前夜を、結局は失敗に終るフランクフルトでの一晩の小競合いを描いたのであろうか。それは、フォンターネにとっては、素材マルヴィッツという歴史的英雄と同様、対ナポレオン解放戦争という歴史的出来事も、もはや問題ではなかったからである。フォンターネが『嵐の前』において描こうとしたのは、歴史的英雄でも歴史的出来事でもなく、もっと人間的なもの、つまり、その時代に生きた様々な人々とその心情なのであった。このことは、

この本のもととなる重点は、むしろ心情にあるのです。¹⁷⁾

と、フォンターネ自身、作品の完成後に述べているし、さらに、作者がこの『嵐の前』の副題を、出版者の意向によって変更されるまで、「12年から13年にかけての冬の時代像と風俗画」(Zeit- und Sittenbild aus dem Winter 12 auf 13)（下線筆者）としていたことからもわかるであろう。¹⁸⁾要するに『嵐の前』においては、人が作品の前面に立ち、歴史はその背景となってしまっている。歴史小説の本来の表現内容であるはずのものが、表現手段になってしまっているのである。¹⁹⁾

これまで見てきたように、小説『嵐の前』は、確かにマルヴィッツという歴史

的英雄を素材として、1813年の対ナポレオン解放戦争の前夜を描いた歴史小説である。少なくとも構想から最初の執筆時期までは、作者の意図はそうであったはずである。しかし、歴史家から小説家へと成長するに従い、作者の視点は英雄や戦争から離れ、その時代に生きた様々な普通の人々へと移っていった。そしてその結果、『嵐の前』は、小説家フォンターネの手になる独特な歴史小説へと作り上げられていくことになるのである。

3. 歴史小説から「多様小説」へ ——歴史家フォンターネから小説家フォンターネへ

小説『嵐の前』に対する批判は、専ら、その統一性、連続性を欠いた構成面に向けられてきた。『嵐の前』は『周遊記』の様式をそのまま受け継いでおり、全4巻で82章もに細かく区切られ、各章がそれぞれのタイトルを持ち、それ自体で完結したエピソードや人物描写になっていて、互いに独立して並存している。Wandreyは、この『嵐の前』の構成を次のように評している。「しかしさらに、この小説の特殊性は、『周遊記』との形式的なつながりの中に求められ得る。そして、この両者は密接に結び付いている。……その結果は、形式のない充満、統一のない豊かさであった。完成された性格描写と並んで無秩序な素材の収集が、非常に生気に満ちた描写と並んで退屈な索引と苦痛な目録が現れている。」²⁰⁾ しかしこのような批判は、『嵐の前』を単に伝統的な歴史小説という観点からのみとらえた場合のものである。

フォンターネは、『嵐の前』の構成面への批判に対して、手紙の中で次のように自らの作品を弁護している。

そのような場合、多様もまた統一となり得ないでしょうか。より大きな劇的な関心は、それは私も認めますが、もちろん常に一人の主人公を持つ小説に向かわれるでしょう。しかし、その広がりと障害にもかかわらず、多くの肖像画とエピソードを含む多様小説もまた——効果においてではなく、しかし芸術においては——統一小説と対等に肩を並べることができるでしょう。……あなた以外の別の人気が私に言いました。この小説は構成が弱いと。逆に、その強みこそ

がこの面にあるのだと、私は全く心から信じています。²¹⁾（下線筆者）

ここでフォンターネが自ら『嵐の前』の構成をそう定義づけている「多様小説」(Vielheitsroman)とは、「統一小説」(Einheitsroman)と対照をなす、つまり、一人の主人公の人間的成長を描くドイツ的発展小説に対立する小説形式の概念であろう。またさらには、歴史を担う一人の英雄を中心に描かれるべき伝統的な歴史小説の原則にも反する、非常に現代的な小説形式とも言える。要するに、歴史小説という構想から発した『嵐の前』が、作者の歴史家から小説家への過渡期を経てたどり着いた姿が、まさにこの「多様小説」なのである。そしてこの「多様小説」という概念は、『嵐の前』のみならず、その後に続く作者の晩年の作品すべてにあてはめて考えることができる。以下では、歴史小説から「多様小説」へと『嵐の前』がたどった変遷を、具体的に作品の中に見ていきたい。

『嵐の前』には、作者自身も認めているように、歴史小説には本来不可欠なはずの主人公、歴史的英雄が存在しない。作品の最初の部分が書かれた1863年から64年頃までは、フォンターネは、ベルントの息子レヴィンを、マルヴィッツの弟アレキサンダーをモデルに作品の主人公にして、もっと伝統的な歴史小説に近いものを書くつもりだったようである。なぜなら、その当時のフォンターネは、作品の題を『嵐の前』ではなく『レヴィン・フォン・ヴィツェヴィッツ』としていたし、実際に作品の第一章では、レヴィンを „unser Held“ と称しているからである。しかしその後、作品の執筆再開の1876年までの間には、プロイセン社会も大きく様変りし、フォンターネ自身も歴史家から小説家へと変貌を遂げた。そして同時に『嵐の前』の構成も、作者の中で、伝統的な歴史小説から「多様小説」へと変化、発展していったのである。

レヴィンはもはやマルヴィッツの弟アレキサンダーではなく、作者自身の若い頃の面影を帯びてくる。レヴィンは母親からフランス人の血を受け継ぎ（フォンターネは、両親ともフランス・ユグノー派の出身であった）、父親のベルントとは対照的に、詩的、空想的な性格であった。そのため、レヴィンはロマン主義文学を非常に愛好し、ベルリンでは友人達と共に文学サークル「カスタリア」会を主催し、自ら詩作もしている。この「カスタリア」会は、明らかにフォンターネが若い頃参加していたベルリンの文学サークル「トンネル」(Tunnel über die

Spree) をもとに描かれている。実際にフォンターネは、レヴィンとはまた別に、「カスタリア」会のメンバーである詩人ハンゼン・グレルの姿を借りて、作者自身の詩を作品中で朗読させている。そしてこの「カスタリア」会を中心として、『嵐の前』においては実に多くの文学論議がなされている。ただしそれらの文学論議は、純粹に文学的な意味においてとらえられるよりも、むしろ、そこに参加している登場人物達の性格をより特徴づけるための手段として見なされるべきである。またさらに付け加えるならば、レヴィンがフランス軍との戦いで捕えられ、幽閉される場面は、フォンターネ自身が1870年の対仏戦争の折、従軍記者として戦地に赴き、そこでスパイ容疑で逮捕されてしまった時の体験に基づいている。

このように、確かにレヴィンは若い頃の作者自身と言えるが、ここで注意すべきは、父親のベルントの場合と同様、レヴィンも若い頃の作者の政治的なところは何も受け継いでいないということである。若い頃のフォンターネは自由主義者で、三月革命では実際にパリケード戦にも参加している。従って、マルク貴族レヴィンと若い頃のフォンターネとを完全に同一視することはできず、それは人間的、文学的な面に限ってのことである。逆に言えば、作者はそれだけ、レヴィンにおいて人間的、文学的なものを際立たせようとしていたのである。

続いては、『嵐の前』の筋書について見ていただきたい。実際の物語は、1812年12月24日にレヴィンがベルリンから領地ホーエン・ヴィエツツに帰郷する場面から始まり、翌1813年2月中旬のフランス軍襲撃の後日談に至るまでの8週間という短い期間に凝縮されている。しかしそこには、波瀾万丈といった筋書は全く見受けられない。この筋書のなさは、フォンターネの作品すべてにあてはまることがあるが、とりわけ『嵐の前』と作者の最後の作品『シュテヒリン湖』(1898)には、その傾向が強く現れている。

歴史小説としての『嵐の前』の筋書は、フランス軍襲撃に向けての事態の進行である。しかしこの歴史的な筋書に関しても、作者自身が、

殺人も火災も激しい情熱の物語もありません。²²⁾

と述べているように、伝統的な歴史小説に付き物の華々しい冒險や戦いの場面が繰り広げられるわけではなく、「国王への忠誠か、それとも国土への忠誠か」と

いうこの作品の中心命題をめぐっての議論が、ベルントを提起者として、様々な人々の間で交されていくのみである。そして、この歴史的命題が解決されぬまま、つまりあらゆる面でまだ機が熟さないうちに、事態はフランス軍襲撃へと至り、当然のこととして失敗に終る。しかも、肝心のフランス軍との戦いの場面は、第4巻19章「襲撃」という一章においてのみ描かれているにすぎない。

ところが、このような歴史的な事態の進行の一方で、歴史とは全く無関係の、極めて人間的、個人的な筋書が展開されていく。それが幾つかの恋物語であり、その中に置かれているのがレヴィンである。レヴィンは従姉妹カティンカとの恋に敗れ、傷つき、そしてそれを乗り越えて人間的成长を遂げていくのであった。要するに、歴史的な筋書と人間的な筋書が完全に分離してしまっているのである。歴史小説の原則に従えば、この二つの筋書は、本来主人公がその内に合わせ持つべきなのであるが、『嵐の前』においては、歴史的筋書はベルントを中心として、人間的筋書はレヴィンを中心として、並行して同時に進行していく。しかしこの相対する二つの筋書も、フランス軍襲撃の失敗により一つになる。と言うよりは、歴史的筋書が人間的筋書に吸収されてしまうのである。

襲撃が失敗し、戦いの中でレヴィンが行方不明になるや否や、ベルントは、それまでの自信に満ちて戦いを主張し続けてきた愛国者の顔から、ただ息子の安否のみを気遣い、自分を責める父親の顔へと一変する。この変貌ぶりは、戦いの翌朝のベルントの独白に現れている。「ベルント、自分を欺くな、自分自身に嘘をつくな。それは何だったのだ。祖国愛、神聖なる復讐だったのか、それとも功名心、虚栄心だったのか。お前に決断を下す権利があったのか。それとも、お前は目立ちたかったのか。先頭に立ちたかったのか。証明してみろ、私は知りたい。真実を知りたいのだ。」²³⁾ ベルントはこの厳しい自己審判において、愛国心や亡き妻の復讐という名のもとに企てられたはずのフランス軍襲撃が、実際は、自分個人の私的感情から発したものであり、最も大切な人々の、時代の総意を欠いていたことをようやく認識するのである。

襲撃の失敗により、物語は完全にその歴史性を失い、捕虜となったレヴィンの救出一点に集中する。そしてレヴィンが無事に救出された後は、作者がもはや作品に対する関心を失ってしまったかのように、それまでは殆ど一日刻みで進行し

てきた物語が、一気に結末へと転回していく。

『嵐の前』は、レヴィンとホーエン・ヴィエッツの村長の養女マリーとの結婚でその幕を閉じる。この二人の身分の違いを乗り越えた結婚は、それ自体は極めて人間的、個人的な出来事であるにもかかわらず、大きな歴史的意味を持つ。なぜなら、マリーは孤児であった。由緒正しきマルク貴族と孤児との結婚。それは、ヴィツェヴィッツ家の歴史にとって、一つの大きな転機であった。プロイセンが対ナポレオン解放戦争によって、新しいプロイセンへと生まれ変ろうとしているのと同様、ヴィツェヴィッツ家もまた、マリーという「新鮮な血」をその血統に受け入れることによって、過去の不幸な歴史に別れを告げ、新しい未来へと踏み出そうとしているのであった。ここにおいて、プロイセンの歴史とヴィツェヴィッツ家の歴史が一つに重なり、その歴史という巨大な流れが、作品の最後で再び前面に登場し、プロイセンとヴィツェヴィッツ家の輝かしい未来への展望を示してくれるのである。

さて、作品の筋書を一通りたどってみたが、そこから、『嵐の前』がベルントを主人公とする疑似歴史小説と、レヴィンを主人公とする発展小説とが重なり合ったものであると考えるのは、いかにも早計であろう。フォンターネが『嵐の前』において描こうとしたのは、歴史的英雄マルヴィッツをモデルにしたベルントでも、若い頃の作者自身の写し絵であるレヴィンでもない。作者が描き出そうとしたのは、一人、あるいは二人の特定の主人公ではなく、多くの様々な人々とその生活領域であった。作者はすでに1866年の手紙の中で、『嵐の前』を書くに当たっての決意を次のように述べている。

私は、むしろ全く私自身に従って、私の好みと個性に従って、仕事をしようと考えています。決まった手本は何もありません。スコットを拠り所とするのも、ただ一般的なことに限ってのみです。私は、私自身と私の素材を正当に評価したいのです。殺人も火災も激しい情熱の物語もありません。私はただ単に、12年から13年にかけての冬の大勢のマルク……地方の人物達を描き出そうと決心したのです。彼らは、当時存在し、そして本質的には今もなお存在している人物達なのです。私にとって問題なのは、軋轢などではなく、当時生まれた感情

や様々な種類の人々がどのように存在し、そして、その感情がどのように人々に作用したのかを描写することなのです。それは、大きな理念、大きな瞬間が、それ自体は非常に素朴な様々な生活領域に入り込んでくるということなのです。²⁴⁾（下線筆者）

Peter Demetz は、作者のこの「様々な生活領域」という言葉を、『嵐の前』を理解する上でのキーワードとしている。そして、大勢の登場人物達を、各々二つずつ相対して組をなす「八つの代表的生活領域」に分類、整理することで作品を説明づけている。²⁵⁾

『嵐の前』には、非常にたくさんの登場人物達と、彼らが属する様々な生活領域が描かれており、その点では、作者の全作品中でも随一と言える。生粋のマルク貴族であるヴィツェヴィッツ家と、ベルリンに住むポーランドの亡命貴族ラダリンスキ一家を中心として、マルク地方のその他の貴族達、牧師、村長、農民達、対しては、ベルリンの貴族達と一般市民である。このようにマルク地方とベルリンとの対比を際立たせる人物設定は、作者の後の一連のベルリン社会小説にそのまま受け継がれ、発展していくが、特に、最後の作品『シュテヒリン湖』と『嵐の前』の間には、多くのつながり、共通点が見られる。例えば、ベルントにおいて描かれている古き良きマルク貴族像は、作者にとって一つの重要なテーマとして追求され続け、『シュテヒリン湖』の老シュテヒリンとバルビー伯という人物像に至って完成されることになる。

フォンターネは、特定の一人の主人公ではなく、大勢の様々な人々が、当時、それぞれの生活領域の中でどのように生きていたかをありのままに描き出すことで、その時代像を浮き彫りにしようとした。さらに言えば、歴史という人間の力を越えた巨大な流れにおいてではなく、日常の些細な事柄、つまり極めて人間的な側面において、時代の眞の姿をとらえようとしたのである。フォンターネは、その優れた歴史的感覚から次のように述べている。

あらゆる伝記的なものを歓迎できればよいのですが。しかし私にとっては、有名人の伝記などはどうでもよいのです。比較的無名の人々の伝記（もちろん非常に珍しい伝記）の方が、はるかに好ましいのです。言い換えるならば、つまり、村や街でのささやかな人生の描写が大切なのです。——偉大な歴史的瞬間などは脇へ押しや

るか、あるいは、少しばかり触れるだけです。²⁶⁾

しかし作者は、このような「ささやかな人生」を描写するに当たって、ただ漠然と写実的に当時の人々の日常生活を描いて終ったわけではない。『嵐の前』に登場する様々な人々は、各自が属する生活領域にふさわしい集まりの場所で、ふさわしい言葉使いで、ふさわしい話題について、活発な会話を繰り広げる。そしてその会話によって、登場人物達の性格づけがなされ、筋書が展開されていくのである。

私は——この点でもまた、私のフランス人の血筋が現れていますが——話すことにおいても、書くことにおいても饒舌家なのです。²⁷⁾

実際、フォンターネはこのような自己分析をしており、さらには、

この国で普通に交されているような活発で明るい、そしてもしできるなら才氣に富んだおしゃべりが、この本の主眼なのです。²⁸⁾

と、『嵐の前』における会話の重要性を強調している。このフォンターネ独特の、登場人物達にあるがままにしゃべらせて物語を形作っていくやり方は、『嵐の前』ではまだ未熟であるが、後の一連のベルリン社会小説において完成されいくことになる。

このように『嵐の前』は、「多様小説」という観点から見れば、その人物設定や会話表現など、後の一連のベルリン社会小説につながる要素を多く含んでいる。Peter Demetzは、『嵐の前』の中にこれら後の社会小説の構成特徴をはっきりと認め、その結果、『嵐の前』を教義的に歴史小説と呼べるのは、ただ素材面においてのみだとしている。²⁹⁾

小説『嵐の前』は、その出発点においては歴史小説でありながら、歴史家から小説家への作者の成長に従い、伝統的な歴史小説の原則からは外れた「多様小説」へと作り上げられていった。『嵐の前』の性格を定義づけているこの「多様小説」というフォンターネ独特の小説形式の概念は、後の一連のベルリン社会小説にそのまま受け継がれ、そして作者の最後の作品『シュテヒリン湖』において、老フォ

ンターネがたどりついた「作者本来の小説形式」としてより完成されて、再び作品の前面に現れてくることになる。つまり『嵐の前』は、作者の最も重要な成長期を通して生み出されたがために、歴史小説としての側面と、社会小説 (Gesellschaftsroman)，現代小説 (Zeitroman) としての側面とを合わせ持つという、まさに晩成の作家フォンターネの処女小説にふさわしい特殊な作品となったのであった。

おわりに

20年以上もの長い歳月をかけて、ついに『嵐の前』を完成させたフォンターネは、その後すぐに、作者の二番目の、そして最後の歴史小説となった『シャッハ・フォン・ヴーテノー』(1882) の執筆準備にとりかかっている。フォンターネはこの二作目の歴史小説では、プロイセンがナポレオン軍に敗れたイエーナ会戦の前夜という、前作『嵐の前』とはまさに対照的な時期を描いている。そして、この『シャッハ・フォン・ヴーテナー』で歴史小説と別れを告げたフォンターネは、その後の一連の社会小説、現代小説でその本領を發揮していくことになる。歴史家フォンターネは、ついに小説家フォンターネへと、その成長を完全に遂げたのであった。

Reuterは、『嵐の前』と『シャッハ・フォン・ヴーテナー』を、「歴史への回り道」³⁰⁾と評しているが、もしそれを回り道と言うならば、まさに必要不可欠な、この上なく貴重な回り道であったと言わねばならぬであろう。

テキスト

Theodor Fontane: Werke, Schriften und Briefe. Hrsg. v. Walter Keitle und Hermuth Nürnberger. (Carl Hanser) München 1970～. (以下略記 WSB)

—注—

- 1) Storm, Theodor: Brief. 5. 8. 1854. Theodor Storm—Theodor Fontane. Briefwechsel. Hrsg. v. Jacob Steiner. Berlin 1981. S. 91.
- 2) Storm: Brief. 19. 8. 1854. 同上, S. 93.

- 3) Storm: Brief. 12. 9. 1854. 同上, S. 97.
- 4) Fontane: Brief. 12. 9. 1854. 同上, S. 99.
- 5) Fontane: „Schill“ WSB Abt. I, Bd. 6, S. 226f.
- 6) Fontane: Tagebuch. WSB Abt. I, Bd. 3, S. 723.
- 7) Fontane: Brief. 31. 10. 1860. Theodor Fontane. Briefe an Wilhelm und Hans Hertz. 1859–1898. Hrsg. v. Kurt Schreinert. Stuttgart 1972. S. 21.
- 8) Fontane: Brief. 1. 11. 1876. WSB Abt. IV, Bd. 2, S. 547.
- 9) Fontane: Aufsatz zur Literatur. „Gustav Freytag“ WSB Abt. III, Bd. 1, S. 319.
- 10) Fontane: Meine Kinderjahre. WSB Abt. III, Bd. 4, S. 13.
- 11) 1852年, 『遺稿から』という題で出版された。
- 12) Johann David Ludwig York von Wartenburg (1759–1830) は, 1812年末, 軍を率いてフランス軍の退却を援護するよう命令を受けたが, 12月30日, タウロッゲンにおいて, 独断でロシア軍と中立の協定を結ぶ。この事件は, 作品中でも取り上げられている。
- 13) Fontane: Wanderungen durch die Mark Brandenburg. WSB Abt. II, Bd. 1, S. 785.
- 14) Fontane: Brief. 24. 4. 1880. WSB Abt. IV, Bd. 3, S. 79.
- 15) Fontane: Brief. 14. 8. 1893. WSB Abt. IV, Bd. 4, S. 274.
- 16) Reuter, Hans-Heinrich: Fontane. Berlin 1968. S. 582 参照。
- 17) Fontane: Brief. 1. 12. 1878. WSB Abt. IV, Bd. 2, S. 637.
- 18) Fontane: Brief. 14. 8. 1893. WSB Abt. IV, Bd. 4, S. 274 参照。
- 19) Wandrey, Conrad: Theodor Fontane. München 1919. S. 117 参照。
- 20) Wandrey: 同上, S. 108.
- 21) Fontane: Brief. 9. 12. 1878. WSB Abt. IV, Bd. 2, S. 639.
- 22) Fontane: Brief. 17. 6. 1866. WSB Abt. IV, Bd. 2, S. 163.
- 23) Fontane: Vor dem Sturm. WSB Abt. I, Bd. 3, S. 648.
- 24) 注22) に同じ。
- 25) Demetz Peter: Formen des Realismus. Theodor Fontane, Kritische Untersuchungen. München 1964. S. 52ff. 参照。
- 26) Fontane: Brief. 6. 12. 1865. Dichter über ihre Dichtungen. Band 12. Theodor Fontane Teil II. München 1973. S. 186.
- 27) Fontane: Brief. 17. 6. 1866. WSB Abt. IV, Bd. 2, S. 163.
- 28) Fontane: Brief. 24. 8. 1882. WSB Abt. IV, Bd. 3, S. 206.
- 29) Demetz: 前掲書, S. 53 参照。

30) Reuter: 前掲書, S. 599.

(きかわ まゆみ 独文学 後期課程)